枝が川へしだれて、水面すれすれに桜が咲くから、橋からの眺めはほんとうに素晴らしいよ。

谷沢川桜と柳の堤

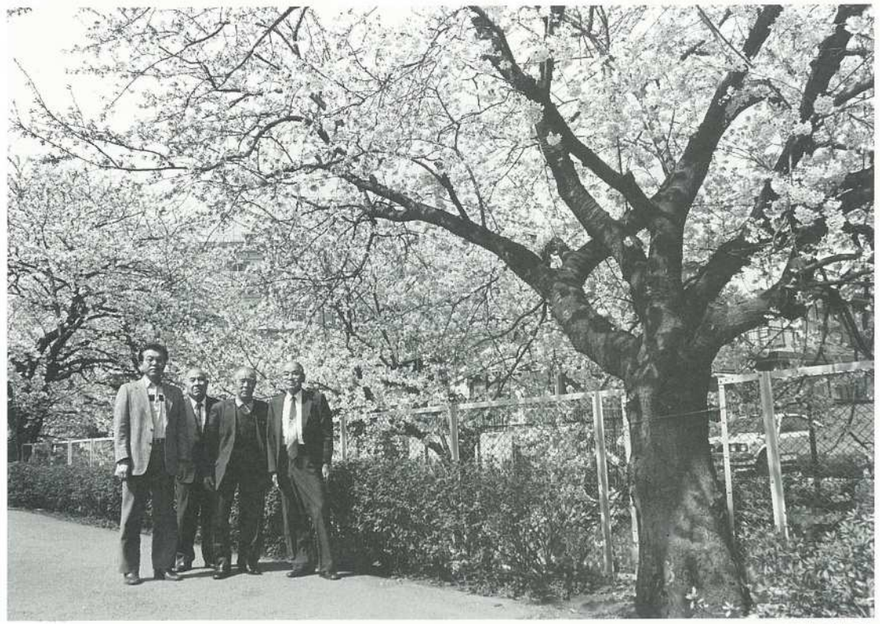
河川の改修などのため
暗渠化され緑道に姿を変えて
いった川も多いが、谷沢川は
等々力渓谷を経て
多摩川に注ぎ、いまも健在だ。
用賀二丁目町会長の鈴木重雄さんは
「昔はよく氾濫に
悩まされたがね」と、
子どもの頃にまでさかのぼる
この川への思いがある。

——谷沢川の桜を植えてから二十七年たちました。先に中町のほうには柳が植わっていたから、こちらの用賀では何がいいかということになってね。柳は芽吹いたときとてもきれいだけど、花は咲きません。桜がいいんじゃあないか、桜・柳と楽しみも二つになるということできめて、苗木を町会で百本ほど植えました。炊出しもして、総出でやりましたよ。それが見事になって、みなさんからいい桜だ、いい桜だとほめられます。二十メートルごとに植えたのが、毎年のびるから大きくなって、今では十メートルごとのように感じられるようになってね。戦前の耕地整理で曲がっていた谷沢川は今のように真直ぐになったんだが、もともと畑の土だったんだから育つにはいいわけですよ。枝がいっぱいに広がって木と木が手をつなぐようになるからね。残念だったのは四十七、八年ですが、首都高速のできたときに半分以上取り去られたこと。でも満開のときにはほんとうに素晴らしいですよ。

——ここは暗渠にしてないでしょ。今はふつうふたしちゃうけど、谷沢川は川の流れが見えますから、水面すれすれに桜が咲いてくれる。枝が川のほうへしだれているからね。橋から見る眺めは実にいいですよ。

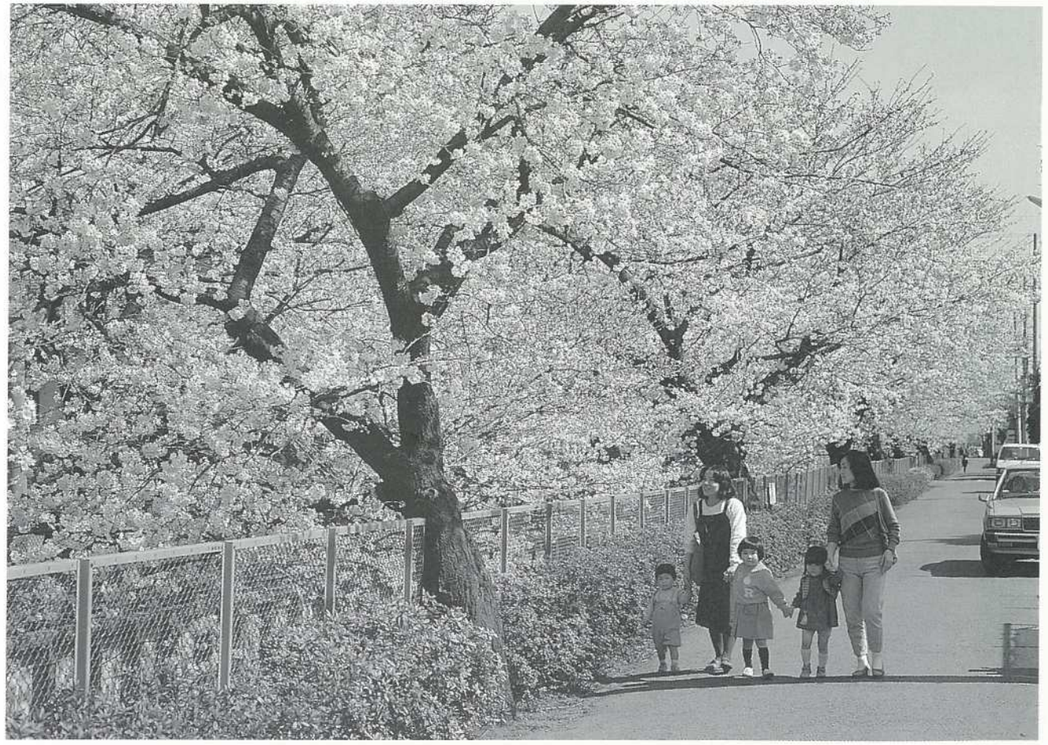
——川も戦後ずいぶん汚くなってしまったときもあったけど、それに比べれば今はよくなった。もう少しすると、ドジョウくらいは出てくるんじゃあないかと期待しています。川沿いに木があるから鳥はいっぱい来る。大きなムクドリみたいなのが目立ちますね。

——まだまだ畑も残っているけど、戦後はどんどんこの辺も住宅が増えました。ビルが建ち出したのは最近のことだけど、マンションができるとやっぱり緑はどうしても少なくなる感じだね。それに新しい人が住人になるわけだから、町会も新しい人と古い人がとけあうのがたいへん。桜もその橋渡しになって欲しいね。



桜並木を守り育ててきた用賀一丁目の町会の皆さん。右端が鈴木重雄さん

桜の若木を植える。20年、30年後の成長が楽しみだ㊐



谷沢川の桜。コミュニティの道ともなっている㊐

玉電沿いのひとつの景勝地になった、といってもいいのではないでしょうか。

北沢川緑道ユリの木公園

ユリの会の会長、新井行雄さんは世田谷の新名所だとおっしゃる。会員の皆さんのユリの木公園をいつくしむ心が伝わってくる言葉だ。景観を支えるにはどうしても地元に住む人々の力が必要だ。

――私は昭和三十九年から住んでいますが、そのころは護岸も整備されないままの北沢川が流れていました。川が汚れてにおいましたし、その当時から比べると、全く夢のようです。

――整備した跡地をどう利用するか問題になりまして、桜の木という意見もありましたし、世田谷区の木のケヤキはどうだという声もありました。ケヤキは成長に何十年もかかりますから、ちょっと長過ぎます。育ちのよいモダンなものはないだろうかということで、まわりまわってユリノキになったようなわけです。赤坂の迎賓館の周りがそうですね。

――ユリノキを選んだのは大成功だったと思います。五年くらいで見られるようになりましたからね。ユリノキも弱点がありまして、だいたい三分の一くらいしか活着しないそうですが、日当りのよいところでしたから八割ほどが着きました。二回目でほぼ根付いてくれましたよ。道の両側に一直線に並んだユリノキの街路樹は、なかなかの景観です。五月の初め新芽が芽吹くころは、パステルカラーでも出せないほど色鮮やかですし、真夏には葉と葉が重なった間から太陽が洩れ素晴らしい景観となっています。それに、葉が歩く人に触れるんですよ。しかし、何といっても秋の紅葉のころがいちばん素晴らしいと思います。豪徳寺の駅前から山下の駅を越えて歩いてくると、忽然として新しい風景があらわれます。玉電沿いの一つの景勝地になったといってもいいのではないでしょうか。

――一直線六〇〇メートルの景勝は、歩く人のための公園になっています。往復すれば一キロはありますから、遊歩道はリハビリのための生活訓練道路の役割も果たしています。朝早くジョギングを楽しむ人もよく見かけますね。

――まあいちばんの悩みは掃除ですね。月一回の一斉清掃が行なわれています。「ユリの会」も十年になりました。年に四、五回会員のペンリレー等で会報を出しています。十年一昔といいますが、その間地についた活動をずっとつづけてきました。緑を育てたことに会員のみんなが誇りを持っていると思います。

新井行雄さん

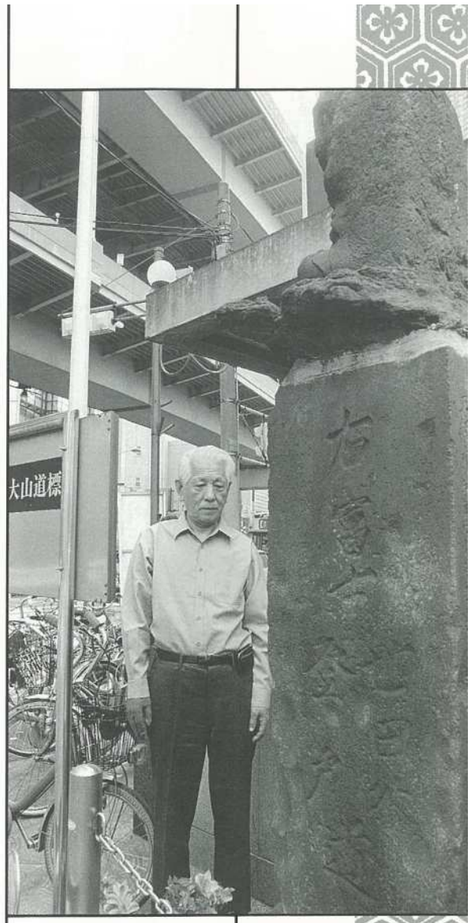
月に1回、会員が総出で掃除する㉛

北沢川緑道ユリの木公園㉛

大山道今昔

茶屋が三軒あったから三軒茶屋の名がついた。大山道は江戸市民の行楽のコースだったんですよね。

世田谷の郷土史に詳しい三田義春さんから
大山道の話をはじめ、
明治大正昭和の世田谷の姿の変遷をお聞きする。
興味の尽きない話題がつぎからつぎに出た。
ここでは大山道にまつわる話題の一部を収録する。



三田義春さん

——大山道というのは俗称で、ほんとうは矢倉沢往還というんです。どうしてそういうかというと、江戸の赤坂見附に始まり、青山から大橋、三軒茶屋、それから世田谷新宿という名前はいまはないんだけど上町下町ですね。さらに用賀、二子を経て荏田、長津田、厚木、伊勢原、秦野、松田を過ぎ、足柄峠の関東側の下の矢倉沢の関所を通って足柄峠を越え竹の下、御殿場とつづきまして、関所の近くには矢倉岳という山や矢倉沢という谷がありますが、そのために矢倉沢往還といったんです。これは古代・中世の東海道だったんですね。芦の湖のそばの箱根の関所を通るのは徳川氏のひらいた近世の東海道で、昔の東海道というのは三島から御殿場に抜けて竹の下、足柄峠、松田、秦野から大磯へ出たんです。徳川時代には裏街道になっていました。

——江戸の中期になると、江戸の人たちの大山詣が盛んになってきました。なぜ盛んになったかというと、江戸も半ばになると江戸の市民に経済的な余裕が出てきました。ところが、幕府は庶民の物見遊山の旅行というのは許していません。ただし、信仰のための旅行は許すというので、大山詣という信仰に名を借りて物見遊山をするようになったわけです。ですから、行きがけは矢倉沢往還を通っていって伊勢原から大山に入り、帰りがけはどうするかというと、だいたい平塚へ出て江の島で精進落しと称して遊興し鎌倉を見物する。中には、品川宿でもう一度精進落しをする豪の者もあった。落語にもなっています。大山道は江戸の市民の一大行楽コースだったんです。もちろん、農民が雨乞いに行ったり、大山の講中などはやっぱり真剣ですが……。

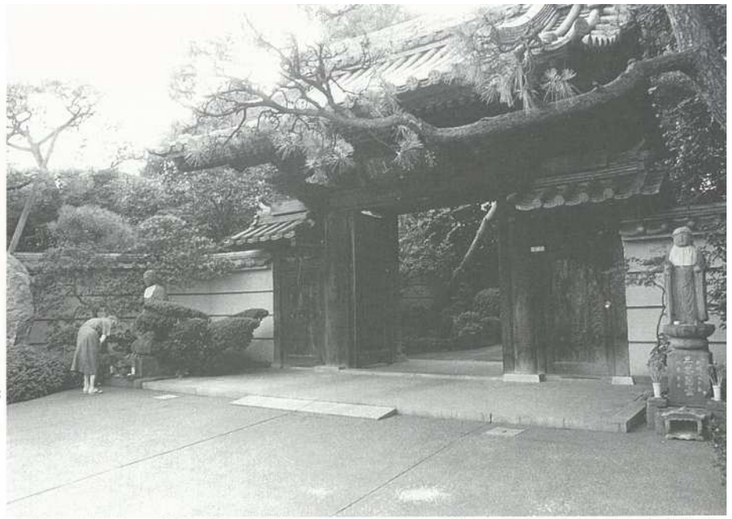
——どういうわけかはっきりしないし、どの時期かもはっきりしないけれども、大山道が矢倉沢往還を利用していたころ、三軒茶屋から用賀に出る近道というのができたんです。新町のところはずれてますが、だいたい今の国道二四六号線です。おそらく、世田谷宿には代官さんがいますからちっとこそぼったいということがある。代官さんのほうも、世田谷村の枝村の新町を繁栄させるという意味があったんでしょう。だから、初めのうちは世田谷通りのほうを大山道といっていたんだけれども、いつの間にか近道のこちらのほうが大山道になってしまったんですね。

——その近道が用賀でもとの道に出会ったわけです。用賀は間の宿になるから、飯田屋という小さな宿屋ができました。足の弱い者が泊ったんでしょう。東京で国体が開かれた昭和二十年代までこの宿屋はありました。

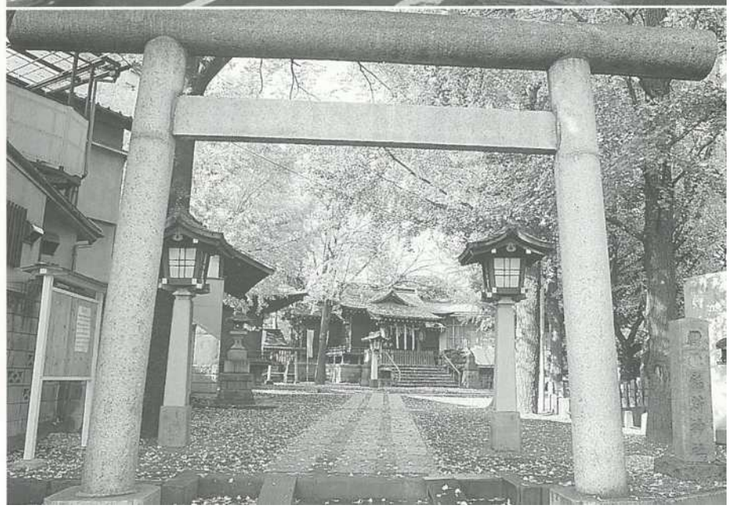
——三軒茶屋で大山道が本道と近道に分かれるようになると、そういうところではみんな一息ついて休みたくなりますから茶屋が三軒できたわけです。信楽、あとで石橋楼という名になりますが、今の協和銀行のところにありました。それから田中屋、現在はたしか瀬戸物屋になっています。もう一つ角屋。その三軒の茶屋があったために辻の名が三軒茶屋になったんです。昭和七年世田谷区になったとき、上馬の一部を割いて町の名になりました。

——百景になっている池尻稲荷のほんとうの入口は、大山道だった細い通りに面しています。この通りは戦前まではたいへんよく大山道の面影を残していました。境内にある「涸れずの井戸」は、赤坂からここまでやって来た旅人の渇いた喉をうるおしたといいます。今でもポンプで少し離れたところに汲みあげて使われていますよ。

(注)正式の宿場と宿場の中間の宿のこと

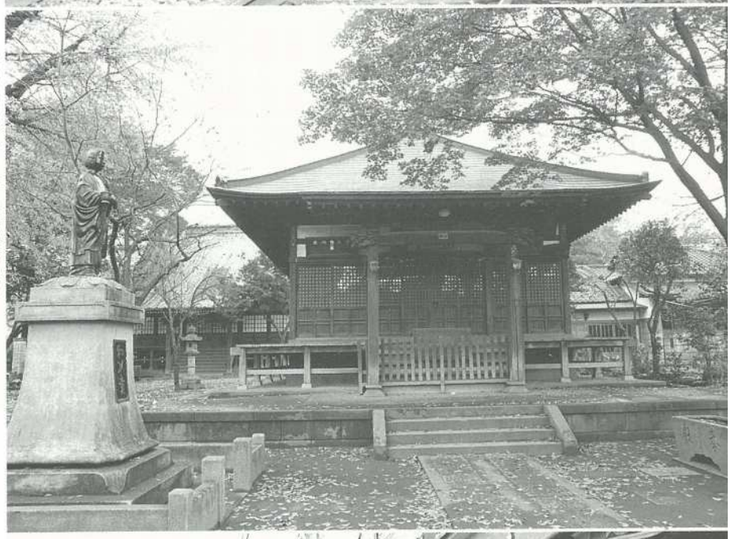

用賀観音で有名な無量寺のあたりは、大山道の間の宿であった㉔

昔からの大山道も健在②


池尻稲荷で旅人は一休みした②

❷大山道と池尻稲荷❹世田谷線（玉電）が走る❺太子堂下ノ谷界わい❻太子堂圓泉寺と欅並木㉔用賀観音の無量寺

玉電の風情を愛する人は多い④



圓泉寺の境内は昔から子ども達の遊び場⑥

下ノ谷界わいには下町情緒がただよう⑤

大山道今昔　三軒茶屋、太子堂あたり

昔からあった道はやさしいなあ。人が歩いてつけてきた道だからね。

子どもの遊びの世界をとおして町を見つめる荻原礼子さんの言葉には、私達が幼年期に感じた最初の風景体験を思い出させてくれるものがある。自動車優先の交通合理主義では推し量ることのできない、町の奥行きというものがこれからのまちづくり、道づくりに求められていると思う。

荻原礼子さん

――太子堂や三軒茶屋のまちを歩いてみると、道が地形にほんとにやさしく馴染んでいるなあと感じます。ずいぶん入り組んだ道のようですけど、この辺の道は、もともとは大山街道や村と村をつなぐ道、水田を見て回る道だったんですね。昔は、台地の上や尾根の部分に道をつくりましたよね。今の淡島通りと大山街道（国道二四六号線）は昔の街道で、このふたつの道にはさまれた谷間の南斜面に太子堂村がありました。そして、昭和の初期に人がどっと移り住んできて、今のようなまちになったんですが、この辺の小さな路地はみんな人間が歩いてつけてきた道なんですね。ところが、震災後の細道路網計画で作られた茶沢通りは、地形やもとからあった道を無視してガサッと切り込んだ形になっていて、とっても不自然な感じがします。

――私道が網の目のようになっている路地の良さっていうものをもう一度まちづくりの中で見直さなくてはいけないなあって思います。子どもの遊びを通してみるとよくわかるんです。私道の路地で建て増しなんかして行き止りになるでしょう。そうするとそこが自然に庭みたいになって子ども達の遊び場になります。車が入ってこないから。それから地図にのらないような家と家との隙間にできたやっと人が通れるようなところ、そういう空間があると子ども達は冒険ごっこやかくれんぼ、忍者ごっこをするんですね。ほんとにおもしろがって…。こういう路地こそ、子ども達の遊びの世界を自由に広げられる場所なんですよね。たとえば、急な坂が階段になっているところがありますが、車は入ることができませんから、歩行者だけの道なんですね。そんな道がまだまだたくさんあるっていうのがこの辺のいちばんよいところじゃあないんでしょうか。消防車が入れないとか防災上のいろいろな問題もみんなのアイデアでなんとか解決して、やさしさのある町にしたいものです。

――百景に入っていますが圓泉寺のエノキ並木がありますね。昔は農家のまわりには屋敷林がありましたが、その名残りともいえます。近くの坂に大きな木の根が出て階段のようになっていたところがあったそうです。根に足をかけて登り降りしていたわけです。今は切って万年塀になってしまって面影はありませんが、古い人はまだ「根っ子坂」って呼んでいます。ほかにも細い路地に大きな木がグーッと張り出したりしたところなんかがまだまだ残っているので、木の下を通り過ぎるとき、ほんとにここは農村だったんだなあって雰囲気を感じます。

――下ノ谷の通りも住宅地のそんな道の性格とつながっていておもしろいです。道に商品がはみ出していて車を通さないでしょう。暗黙の姿勢なんですね。車で通ろうとする人はたいへんですけど、歩行者は大きな顔で通ります。あっちの店こっちの店と見て買物できるわけです。関東大震災後下町の人達が移ってきて下ノ谷の町は出来たんですけど、下町のあたたかさというか人の生活の匂いがあります。夕暮暗い路地から出てくると裸電球のついたお店がある。そういうメリハリが人の住む町の原点なんではないでしょうか。下ノ谷の通りは夕暮になるとにぎわいますが、そんなときがいちばん心ひかれます。路地だってなまめかしく色っぽい、そんな懐しい気配がたちこめます。

世田谷風景変遷史

世田谷の大きな緑のスペースや公共施設は、戦前のゴルフ場やら軍隊の施設なんかがもとになっているものが意外に多いんです。

三田義春さんに現在の世田谷の風景に至るまでの歩みを教えていただいた。一世紀近くの間さまざまな出来事があって、いまの私たちの住んでいるまちが形成されてきたことがわかる。そしてその歩みがまちのところどころに小さくあるいは大きく残されている。百景も実はそうした歩みの百の記念碑だといえるのではないだろうか。

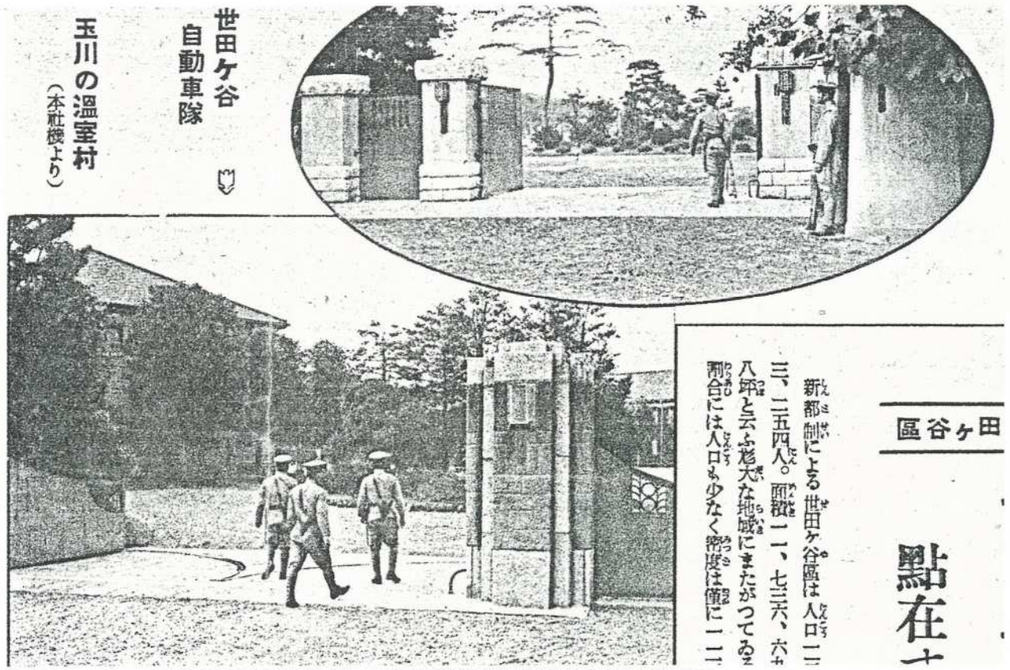
——明治の中頃まで世田谷全体に農村風景が広がっていたんですが、これが大きく変わっていったのは、やはり軍隊の施設が置かれるようになってからですね。駒沢練兵場が明治三十年、明治三十一年には三宿から三軒茶屋にかけて大山道の南側に瓦葺木造の平屋や二階建ての大きな兵営が建ち並んで、砲兵の連隊が置かれました。砲兵ですから大砲を引かなきゃあ移動できないでしょ。野砲や野戦重砲は当時としてはずいぶん大きなものです。馬も六頭ないし八頭で引くわけですから、道も曲がったところは都合が悪い。だから道も大砲が通れるように変えられました。太子堂には陸軍の病院が、下代田には陸軍獣医学校が移ってきました。大正時代になると、今の東京農大のところに陸軍自動車学校も設けられて、まあ軍隊のまちのようになったわけです。大橋から池尻、三宿、三軒茶屋にかけて、日曜日に外出する兵隊さん相手の食べ物屋とか軍服や軍帽屋、軍隊御用の宿屋なんかが軒を並べ出すようになります。

——軍隊には馬がたくさんいましたが、馬糞や寝藁が出ます。これをきめられた日に引き取るために、車を引いて農民がたくさんやってきます。これがちょっと臭い風物詩でしたよ。私たちはボロ引きと呼びましたが、これは馬糞をボロクソともいったからです。大変重かったもんですから、子ども達が後押しをしたものでした。

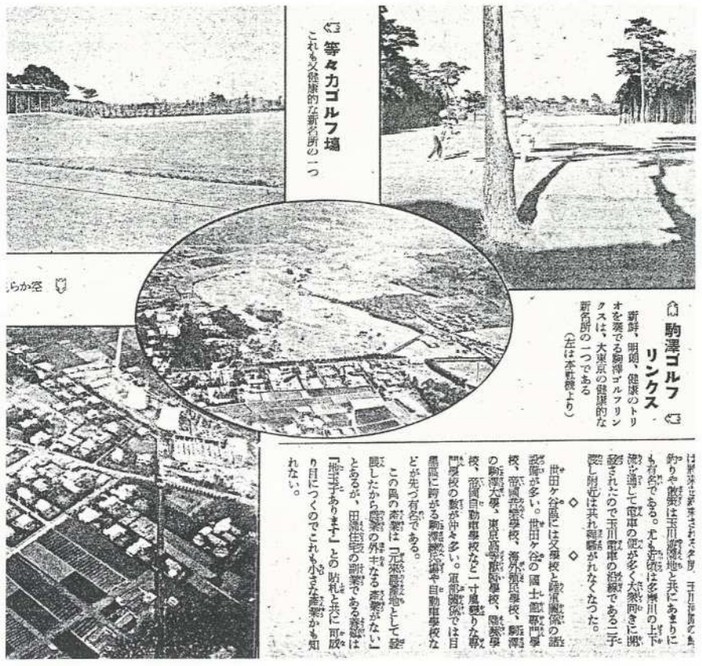
——明治四十年には玉川電車が開通しましたが、線路の幅は一メートル少々、車両は木造で定員四十人のが十両で、今からみればかわいらしいものでした。ジャリ電といって、客車の後につないだ無蓋貨車で多摩川の砂利も運びましたが、とくに震災後は東京復興のために砂利がたくさん必要になって、貨車専用もできました。つづいて、大正二年には京王電車が開通し、震災後は目蒲線、東横線、大井町線や井の頭線もできて、私鉄網の発達した現在の世田谷の姿の原型が形づくられてきました。

——当時の人々の眼にはとてもハイカラだったと思いますが、大正二年には東京ゴルフ倶楽部の駒沢ゴルフ場がオープンしています。九ホールありました。財閥の重役とか華族や外国人がプレイしたんで、もちろん今のように大衆的ではありません。キャディーは小学校の五、六年生から上の子どもで、一回りすると三十銭になりました。一人前の職人の一日の手間賃が一円二十銭のころでしたから、二回りもすればたいした額になります。私も二、三カ月働きましたが、小学校は子どもの欠席が多くて困ったということです。このゴルフ場はいま駒沢公園になっていますが、世田谷の大きな緑のスペースや公共施設は、戦前のゴルフ場やら軍隊の施設なんかがもとになっているものが、意外に多いんですよ。

——震災後は都心から移って来る人が多くなって、区画整理や宅地化を目的



▲▼昭和7年10月1日東京朝日新聞発行第16678号附録、大東京市制記念東京朝日新聞附録、新東京大観下巻より



とした耕地整理も区内各地で盛んに行なわれました。地図を見ると、当時の整理の結果がはっきりわかります。住宅地の分譲も始まって、大正二年には玉電が無料パスのサービスを住宅を購入した人に行ない、話題になっています。郊外の住宅地としてだんだん発展していったわけです。

——戦争中は空襲もあってずいぶん焼けました。戦後の復興は早かったと思いますが、大きく変わったのは東京オリンピックを境にしてですね。立派な道路ができて、ビルもつぎつぎに建ちはじめ、まちの装いが一新されました。私の記憶では、三軒茶屋に十階建の銀行ビルができてから二、三年で通りにビルが目立つようになったと思います。でも、今の世田谷のまちの風景をじっくり見ると、昔からの歩みをちゃんと残していることがわかりますよ。